

情報社会の思想

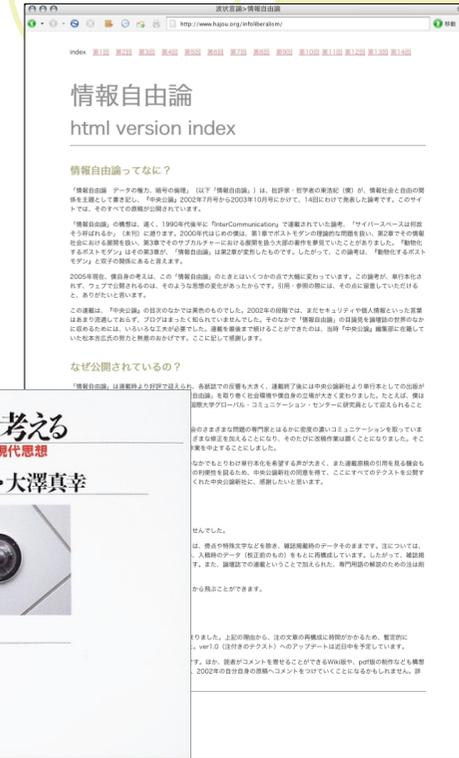
東浩紀 hiroki azuma

批評家／東京工業大学世界文明センター人文学院特任教授

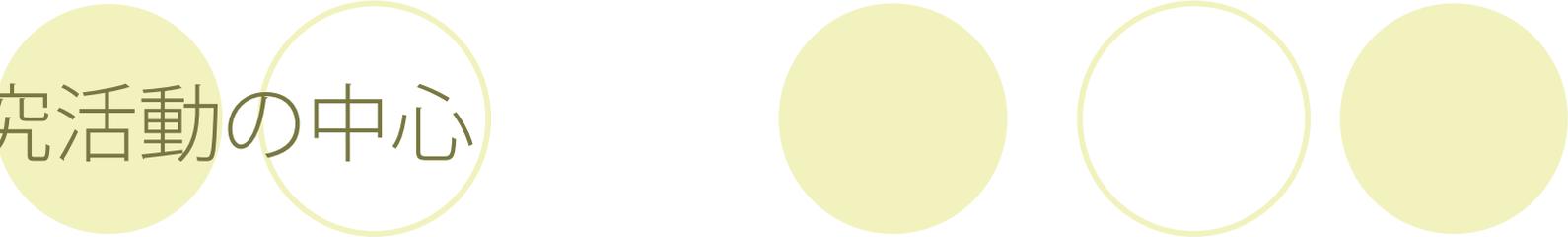
2007/2/19

自己紹介

- 東京工業大学世界文明センター人文学院特任教授
- 批評家
- 専攻：現代思想／情報社会論／表象文化論
- ポストモダン論を基礎に学際的な研究・評論
 - とくに情報技術と社会秩序の変化に注目
- 1971年 東京で生まれる
- 1998年 「存在論的、郵便的」 (新潮社)
 - サントリー学芸賞受賞
 - 翌1999年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了 (学術博士)
- 2001年 「動物化するポストモダン」 (講談社) 出版
- 2002年-2003年 「情報自由論」 (『中央公論』連載、未刊)
 - <http://www.hajou.org/infoliberalism/> で公開中
 - 講談社近刊の評論集に収録予定
- 2003年 「自由を考える」 (大澤真幸との共著、NTT出版)
- 2004年-2006年 「情報社会の倫理と設計についての学際的研究」 主査
 - <http://www.glocom.jp/ised/> で公開中
 - 国際大学GLOCOMで若手研究者・企業人を集め14回の連続シンポジウム
- -7月 国際大学GLOCOM副所長
- 2006年10月- 東京工業大学 世界文明センター 特任教授



研究活動の中心



ポストモダン思想を情報社会の理解に役立てる



20世紀の人文思想の概念を
工学的にデザインされる（であろう）
21世紀の社会の理解に役立てる

講演の要旨

ポストモダン化
(多様性への寛容)

情報技術の環境への
埋め込み

環境管理

予備知識：ポストモダン思想とは

● ポストモダン思想

- フランス現代思想→アメリカの消費文化
- 1970年代に台頭
- 左翼的、批判的、美学的言説
- 日本では1980年代に流行しバブル崩壊とともに半ば忘却
- 英語圏では比較的定着→社会学、文化研究

● キーワード

- 知の全体性の喪失（**大きな物語**の喪失）
- 消費社会の高度化（シミュラークル）
- 情報技術とネットワーク（仮想現実、「リゾーム」）
- 人間性の変容（「再帰性」、多重人格）
- 資本主義の変容（ポストフォーディズム）
- 社会秩序の変化（規律訓練から環境管理へ、リスク社会）
- 国民国家の解体とグローバル化（「帝国」の誕生）
- ネオリベラリズムの台頭

「情報社会」の2つの思想

● 監視社会論

- 人文系
- ポストモダン思想、リベラリズムの流れ
- 流動性の増加＋ネオリベラリズム＝徹底した監視社会
- 「ビッグブラザー」「ハイパーパノプティコン」
- 1990年代の英語圏「監視社会研究」
- D.ライアン『監視社会』、酒井隆史『自由論』
- 左翼的イデオロギーと結びつきがち（例：住基ネット騒動）

● 知識社会論

- 経済、経営系
- 未来学（D.ベル、A.トフラー）→1980年代に地盤沈下→1990年代後半に復活
- 情報技術＋自由主義＋創発＝新しく自由な主体の誕生
- 「エンパワーメント」
- Blogs, Wikipedia, Google, YouTube…
- 伊藤穰一「創発民主主義」、梅田望夫『ウェブ進化論』
- 進歩主義的楽観論と結びつきがち（例：ウェブ2.0騒動）

● （「ハッカー主義」の伝統）

- このどちらにも入らない両義性があるが、今回は省略

素朴な疑問とこの講演での解答

それで、情報技術は
人間を幸せにするのかどうか？



情報技術に支援された社会は
人間の動物性をうまく利用する社会



情報技術は人間を
動物的には幸せにする（快を増やす）が
人間的にはあやしい（自由や世界性の感覚を奪う）
（しかし人間はもともと動物なのだからそれでいいとも言える）

環境管理とは

● 規律訓練 (discipline) → 環境管理 (control)

★「規律訓練」はMichel Foucaultの概念、「環境管理」は発表者の造語

● 規律訓練

- 近代社会(18c-20c)
- 倫理観、道徳心、イデオロギー、教育、主体的な判断による行動の制御
- 人間の自由意志に期待する社会秩序の維持方法
- 罪を犯す可能性はあるが、それを意志で**克服**するように教育する
- 例：酒を飲んだら車を運転しない

● 環境管理

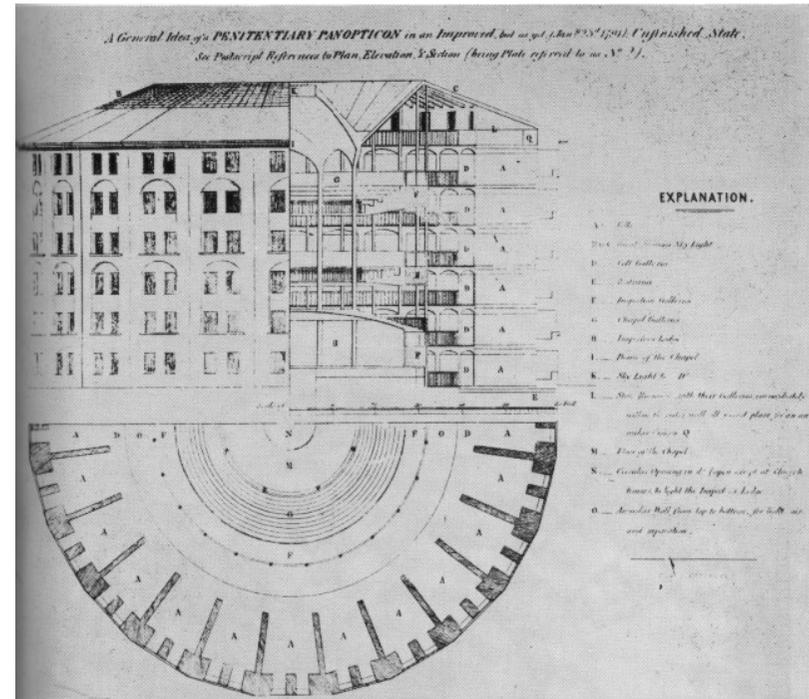
- ポスト近代社会(20c後半-)
- 快楽、モチベーション、環境の改変、無意識を利用した行動の制御
- 人間の自由意志に期待しない社会秩序の維持方法
- 罪を犯す可能性が少なくなるように、物理的・情動的環境そのものを**改変**する
- 例：呼気のアルコール濃度が高いと車が発進しない

規律訓練とは

- M.Foucault
- 『監獄の誕生』 1975,邦訳1977
- 近代社会の特徴は一望監視施設 (panopticon)にある
- 近代的主体とは自分で自分を監視する (させられる) 主体である
- 経験的／超越論的二重体
- Big Brother (G. Orwell)と類似

『監獄の誕生』
新潮社
口絵17

ベンサムによる一望監視施設的设计図



環境管理はなぜ台頭するのか

● 社会的要請＝ポストモダン化

○ 近代社会（国民国家）

- ひとびとを「主体」「国民」として「教育」し、秩序を保つ時代
- 他者を「内包 include」し、**コンセンサス**を作り出していく時代
- 「隣組」、住民の相互監視

○ ポストモダン社会（グローバルな帝国）

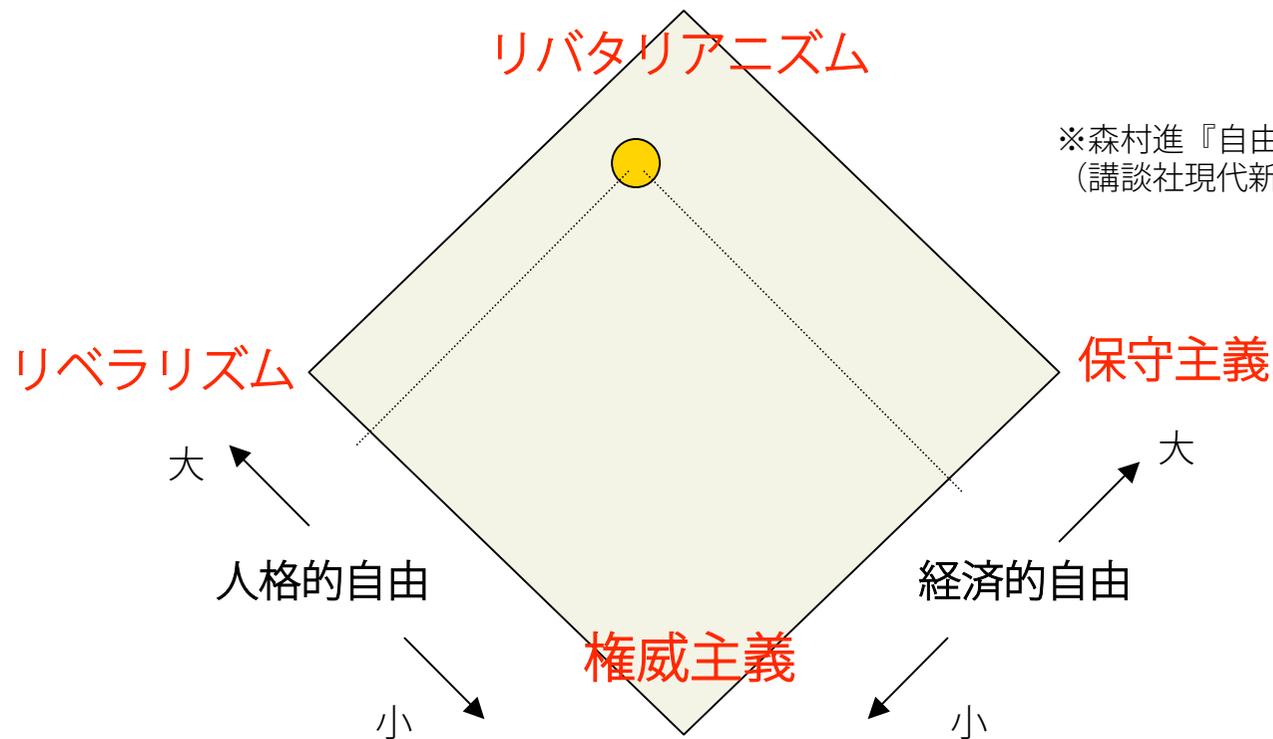
- ひとびとの価値観、行動原理の差異を放置しつつ、秩序を保つ時代
- 放置の肯定面→リベラリズム／放置の否定面→ネオリベラリズム
- 他者を「排除 exclude」し、**リスク管理**を行う時代
- セキュリティマンション、ゲーテッドコミュニティ

● 技術と社会の共進化？

- 情報化とポストモダン化の同時代性
- Cass Sunstein 「インターネットは民主主義の敵か」
- ユビキタス技術は「**権原(entitlement)理論**」（Nozick）の夢を実現する？

3つの未来社会像

- 保守主義＋近代回帰（近代的主体）という解
- リベラリズム＋アイロニー（解離的主体、Rorty）という解
- リバタリアニズム＋工学的管理（動物化）という解



※森村進『自由はどこまで可能か』
(講談社現代新書) から引用

『東京から考える』

- 「工学的に自由」な都市の光景はどうなるか？

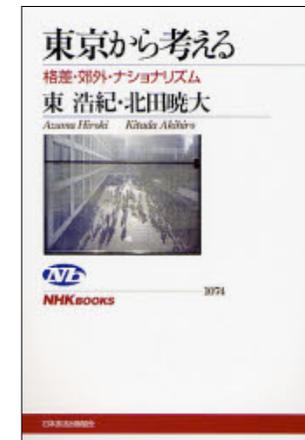
- 「ファスト風土化」する郊外
- 「人間工学的に正しい」デザインの拡大
- セキュリティの上昇
- 「個性」はテーマパークとしてしか存在しない

- 東←→北田の対立点

- ファスト風土化は不可避 ←→ 個性ある街を残す
- 人間は動物である ←→ いや、とはいっても……
- 小さな共感可能性 ←→ 理解可能性の上昇
- ローティのポストモダニズム ←→ ロールズのリベラリズム

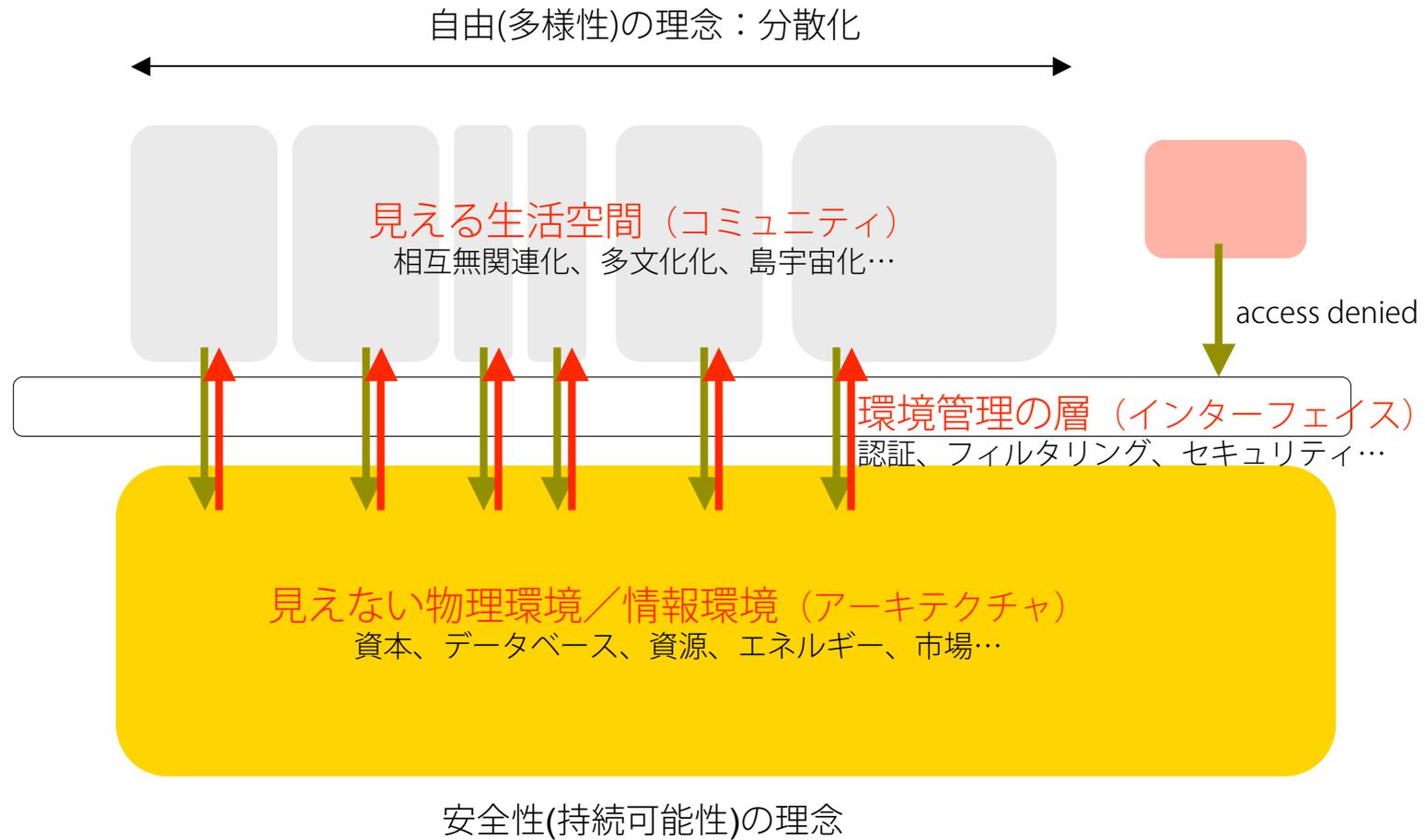
- ライフスタイルの対立

- 「パソコンの前に座ってペットボトルの飲料を飲み、ポテトチップスを食べながら、インターネットをしたり、ゲームをしたり、携帯でメールを打ったりしているという姿」が団塊ジュニアの「下」の典型（三浦展『下流社会』）
- →それは経済的格差でも世代格差でもなく、ライフスタイルの問題、さらには「動物的快楽」への感度の問題ではないか？
- しかし実際には、ロハスもヤンキーもみなファスト風土かを受け入れる……



東浩紀+北田暁大
『東京から考える
格差・郊外・ナショナリズム』
NHKブックス

二層的にデザインされる21世紀社会



工学的自由＝環境管理型社会の諸問題1

- 権力の不可視化、非人称化
 - 例：AmazonのRecommendation
 - 監視社会論の限界
 - 洗脳と自己決定の曖昧な境界→責任の所在は？
- コミュニティの相互不可視化、相互不干渉化
 - Google Suggest, Google News …etc
 - 情報のフィルタリング
 - 人間の「認知限界」（Simon）がある以上不可避
- そもそも**自由意志**はどうなった？
 - 積極的自由 vs 消極的自由
 - 「自由意志とは、外部要因が見当たらないときの、内的過程への原因帰属の様式そのものなのです。[……]「自由な行為」は、もっとも意識にのぼりにくいときに実現します。没頭し、われを忘れているときに。」（下條信輔、『<意識>とは何だろうか』、講談社、1999、pp.215-216）→管理されているときに「自由」なとき？
 - 「自由な意志決定」を前提とした社会制度と齟齬を起こしてしまう！

工学的自由＝環境管理型社会の諸問題2

- 「世界性」「配慮」の消失
 - ハンナ・アーレント「活動的生活 vita activa」の3区分
 - 活動 action
 - 仕事 work
 - 労働 labor
 - 人間の人間性は「活動」によって定義される
 - 「活動」＝公的領域（世界性）／「労働」＝私的領域（無世界性）
 - 情報技術が可能にする世界
 - 労働＝遊び（Torvalds「Just for fun」）
 - 全体性のない協調作業（Wikipedia, Open Source, Web2.0）
 - 細分化されグローバルに展開された分業体制
 - セキュリティ（se+cura = without care）の上昇
 - 「世界に対する関心」を失いつつある世界
 - 「世界に対する関心」がなくても維持できる世界
- そこで他者への共感可能性をいかに維持していくか？